

東京、2001年12月8日

親愛なるモーリスへ、

葉書に書かれた君の文字をみて喜んでいきます。

友人よ、師よ、日本女性のそれは西洋の女性のように膨らんだカーブや自由奔放な丸みの大食漢のような攻撃性は持っていない。見逃すことのできない山よりも、何かを探索する畑のようだ。

それは平らで、目でその存在を確かめるのがやっと、手でその不足を探るのがやっと。しかし肌の張りは慎みやかに到達の企てに対して開かれ、このわずかな存在が豊満以上のものとなる。ちょっとした勾配、わずかな厚み、ほとんど見つからないものほどやつきになって探すもの。

日本の乳房のほのかな気配を感じる。

目は、まだ僕はどっぷりはまりこんでいて、君に話すことはできない。

話をする事によって、かえって始めに受けた衝撃から離れてしまう。むしろ美文や演説にたよることなく、肉体の単純な生々しさを感じる方が良い。沈黙は金。

「ブドウを吸いたまえ、しかしお願いだから、その話はしないでくれ」

自分が話をしているのを聞いて突然感じるあの困惑を君も僕と同じくらい知っているだろう。真実にむかって静かな小道を歩んでいたその時に、突然真実からあれほど遠くなることを。幸いなことに、日本の書き言葉は、理屈をこねたり、長々と説明をするたぐいのものではない。書かれた文章の意味は見れば一目瞭然だ。

ところで、書くと絵を描くとは同じことば、「かきます」。同じニュアンス。

心から、

エリック